

2021年11月9日
一般社団法人日本かまぼこ協会
全国蒲鉾水産加工業協同組合連合会
代表理事会長 下村全宏

報道関係者各位：

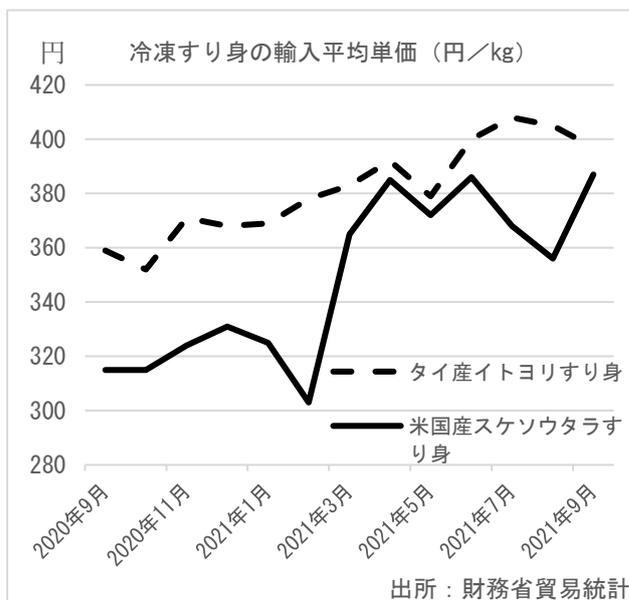
製造コストが軒並み高騰 価格改定にご理解をお願いします

蒲鉾、ちくわなど魚肉ねり製品の製造コストが急騰しています。包装材料費、物流費や人件費も上昇し、追い打ちをかけています。一方、製品の値段（小売価格）は上がらない状況が長年続いています。

このため、コスト高騰に耐えられない全国のメーカーは、かつてない採算の悪化に苦しんでいます。自助努力によるコスト圧縮は限界に達し、価格改定をせざるを得ない状況です。

各位におかれましては、私共メーカーの苦境を何卒ご理解ご賢察賜り、広く全国（小売業者や消費者等）にお伝えくださいますようお願い申し上げます。

1. 主原料のスリミ価格が高騰

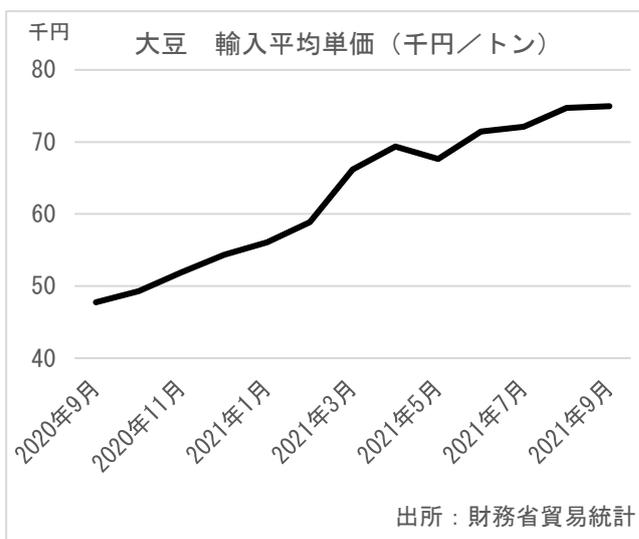


魚肉ねり製品の主原料は冷凍スリミで、その大部分を輸入に頼っています。最大の供給源の米国産スケソウタラ・スリミは、輸入平均単価が今年3月に365円/kgに跳ね上がり（前月比60円高、比率で20%増、財務省貿易統計）、その後7ヵ月連続で前年を上回る高値（前年同期比10%高）です。

アジア産スリミ主力のタイ国産イトヨリ・スリミも高く、昨年11月から急騰し、今年6月から9月は13年ぶりに400円/kg台をつけています。

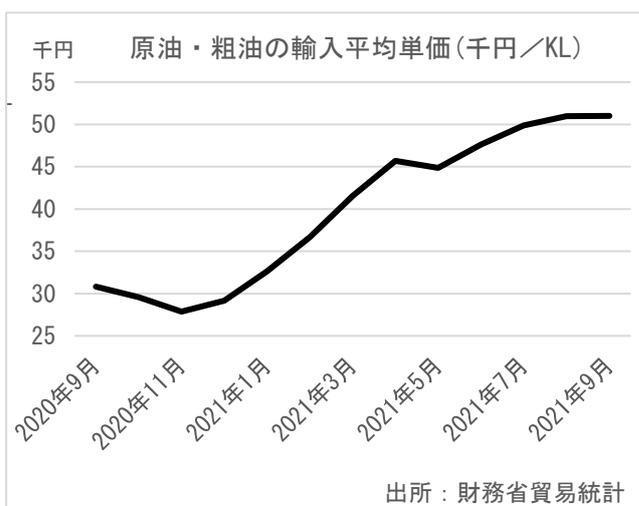
世界的なスリミ需要増に対して、供給が少ないため、輸入に頼る全国のメーカーは高値での調達を余儀なくされています。

2. 大豆や食用油、砂糖の価格も高騰



スリミ以外の副原材料も値上がりしています。大豆の輸入平均単価はここ1年で1.6倍に上昇（2021年9月75千円/トン、前年同月比158%、財務省貿易統計）。大豆の高騰に伴って、各種メディアで報道されているとおり、食用油や大豆タンパク質がこの1年の短期間に再三値上げされています。砂糖も今年3回目の値上げが予定されているなど、魚肉ねり製品メーカーは悪影響を受けています。

3. 原油高騰で燃料費、電気料金、包装材費、運賃なども値上がり



製造コスト高騰に追い打ちをかけているのが7年ぶりの原油高値です。原油の輸入平均単価はここ1年でほぼ2倍に高騰しています（2021年9月51千円/kl、財務省貿易統計）。

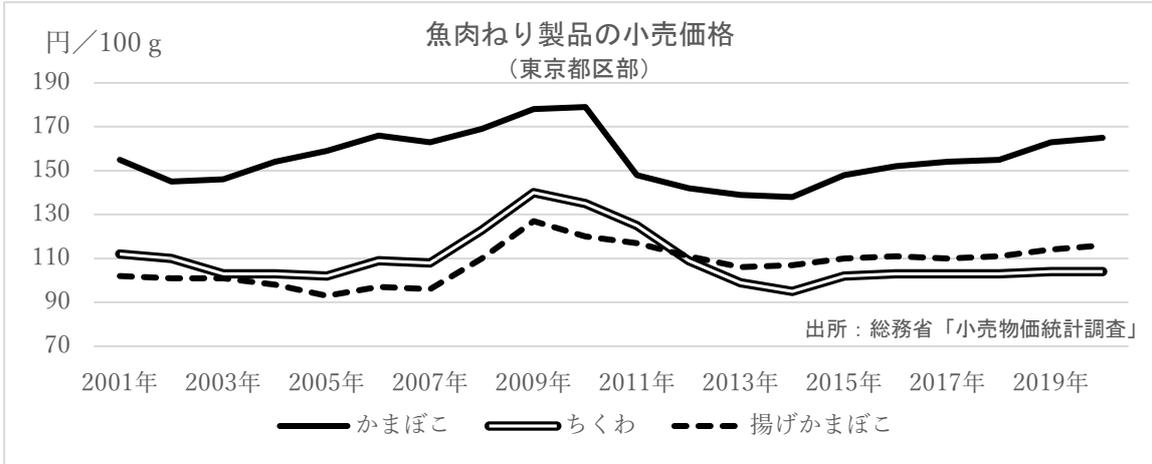
原油がベースの燃油、電気、食品包装資材、配送費などが軒並み値上がりし、製造コストを更に押し上げています。

4. コストは跳ね上がる一方、魚肉ねり製品の小売価格は長年低いまま

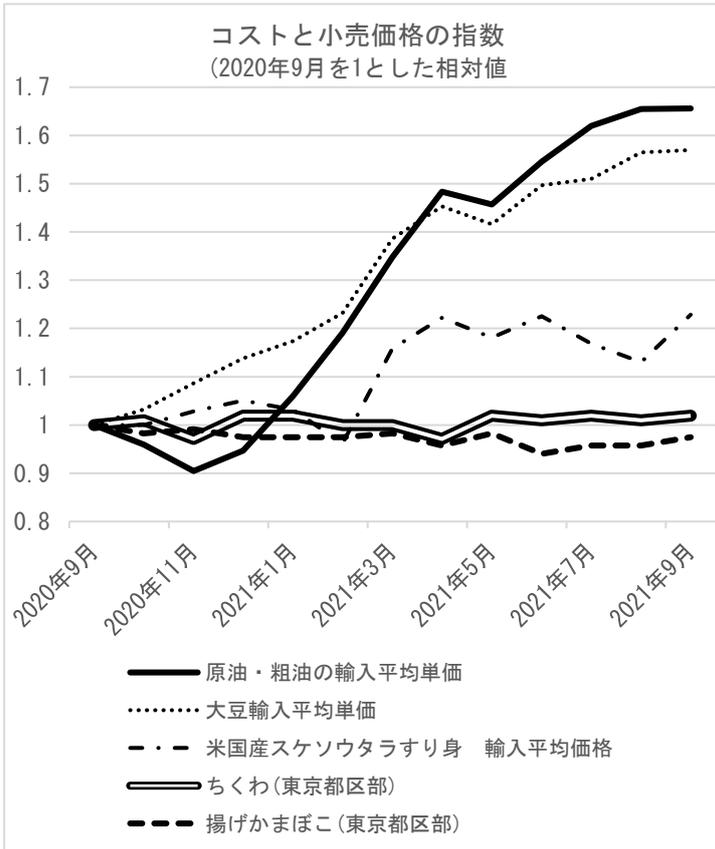
魚肉ねり製品の小売価格は、長い間ほとんど上がっていません。東京都区部のデータを代表にして、ここ20年間（2001年～2020年）の推移をみると、グラフのとおり小売価格は低いまま。現状は20年前と同じ水準です（かまぼこ：2020年165円/100g、ちくわ：2020年104円、揚げかまぼこ：2020年116円、総務省「小売物価統計調査」）。

2008年から2009年にかけて、やむを得ず値上げをしました。主要因は、この時期に漁獲量の激減によって米国産スケソウダラ・スリミ価格が高騰したこと。同時に、2008年のリーマンショック直後の原油高騰の影響を受けたことによります。現在の状況に酷似してい

ます。



5. 物価指数で見ると、製造コストの高騰によるメーカーの窮状が鮮明



上記1から4について、2020年9月を基準数値とした物価指数で比較したのが左グラフです(2020年9月～2021年9月)。

スリミや大豆、原油など国際相場の高騰で製造コストが大幅に上昇。それにひきかえ、魚肉ねり製品の店頭価格は上がっていません。メーカーの費用負担が増え、利益が圧迫されていることを鮮明に示しています。

全国の中小メーカーが魚肉ねり製品づくりを営んでいます。コストの高騰を転嫁できなければ、事業継続が困難です。量目調整では苦境を乗り切れません。

価格改定に是非ご理解をお願いします。

【本件に関するお問い合わせ先】

一般社団法人日本かまぼこ協会 専務理事 奥野 勝
Tel (03)3851-1371 e-mail: info@nikkama.jp